

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

1

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

a なぜ現代では「承認」の問題が議論される際、コミュニケーション能力ばかりが問題にされるのであろうか。またこうした議論に一定のリアリティがあるとしたら、つまり「価値ある行為」よりもコミュニケーション能力のほうに承認を獲得する上で重要になっているとしたら、それは一体なぜなのだろうか？

b ある行為が多くの人に「価値あり」と認められるのは、その判断の規準となる価値観を多くの人々が共有しているからだ。もしそうした社会共通の価値観への信頼が崩れ、誰もが疑いを抱くようになったなら、私たちは参照すべき価値判断の規準を見失ってしまい、その結果、「価値ある行為」によって社会から承認を得る道は、かなり限定されたものになってしまう。見知らぬ人々の承認を想定することが難しくなってしまうのだ。その結果、ごく身近に接している人々に気に入られるかどうかだけが、承認を維持する唯一の方法のように見えてくる。

c コミュニケーション能力ばかりが承認に関する議論の俎上そじょうに上るのは、このように周囲の人々の承認だけが問題化されるからだろう。それは、社会共通の価値観への信頼がゆらぎ、価値観の相対化、多様化が進展していることに起因する。

d かつて社会学者のデイヴィット・リースマンは第二次世界大戦後のアメリカ社会を評し、他者からの信号に絶えず細心の注意を払い、他者の価値観や期待に同調して行動する社会だと主張した。彼はこれを「他人指向型」の社会と呼称し、「ひとが自分をどうみているか、をこんなにも気にした時代はかつてなかった」(『孤独な群衆』一九五〇年、加藤秀俊訳、みすず書房、一九六四年)と述べている。これは、他者の承認を過剰に気にして行動する人々、と言い換えることもできるだろう。

e 当時のアメリカ社会では、産業の急速な発展によって社会構造が変化し、大都市においてはさまざまな人種・文化と接触する機会が増えていた。消費社会における新たな価値観をはじめ、多様な価値観に直面するなかで、人々は承認の規準を見失いがちになっていた。しかし一方で、サービス業などの第三次産業に従事する中産階級の人々が増大し、彼らにとっては相手が気に入るかどうかという他者の承認が、仕事の上でも重要であった。他者の期待に同調する行動様式が増えていた背景には、おそらくこのような事情があったのだ。

f **A**、こうした戦後のアメリカ社会の様相が、現代の日本社会とコクジまなしていることは言うまでもない。というより、社会共通の価値観への信頼が崩れ、相対主義が蔓延まんえんしている点では、現在の日本のほうが伝統的価値観と決別している面がある。

g 事実、いま日本の社会においては、「他人指向型」の人間がいたるところで増えている。若い世代を中心に多くの人々が、身近な人間関係において場の空気を読み、気の利いた発言を心がけ、気遣いのある態度を絶やさない。それはつまり、自らの行動の指針を自分が信じる価値観や信念に求めるのではなく、他者の判断に委ねている、ということなのである。

h リースマンは「他人指向型」の人間が増えていることを、決して悲観的に見ていたわけではなかった。「他人指向型」の人間は伝統的な価値観に固執せず、異なった価値観をもつさまざまな人間を受け入れ、多様な人間に対応できるだけの柔軟性を備えている、そう考えていたからだ。教育水準の向上やマス・メディアの発達、社会的移動の高まりは、こうした感受性の形成に拍車をかけるはずであった。

i **B**、いまの日本人に、はたして「見知らぬ他者」の価値観を受け入れるだけの柔軟性があると言えるだろうか。むしろ多様な価値観を前にして、何が本当に価値があるのかわからなくなり、この混乱から逃れるために「見知らぬ他者」を意識からハイジヨあし、身近な人々の価値観以外には耳を閉ざしている。というより、ゲンミツあには何の価値観もさほど信じておらず、身近な人々の言動にのみ留意し、どのように反応すれば嫌われないか、受け入れてもらえるか、ただそのみを感じている。

j 社会共通の価値観が崩れれば、「価値ある行為」によって承認を得る道が見えなくなり、強い承認の不安とニヒリズムが生み出される。その結果、身近な人間の承認を維持するために、かつてないほどコミュニケーションが重要な意味を帯びてきたのである。

k 見田宗介みたむねすけによれば、日本において社会共通の価値観が壊れはじめたのは一九七〇年代以降であり、以後、「虚構の時代」と呼ぶのがふさわしいような新しい時代に突入する。それは「関係の、最も基底の部分自体が、『わざわざするもの』、演技として、虚構として感覚される」(『社会学入門』岩波新書、二〇〇六年)時代である、と見田は言う。たとえば親子や夫婦といった関係も、親として、子として、夫として、妻として、各々が自分の役割を演技として感じている、どこか現実ではない虚構として感覚されている。

l 東浩紀あずまひろきはこうした「虚構の時代」について、「大きな物語がフェイクとしてしか機能しない時代」(『動物化するポストモダン』講談社現代新書、二〇〇一年)だと指摘している。

m 「大きな物語」とは宗教やイデオロギーなど、個人が生きる意味を見出すための社会共通の価値観であり、**C** キリスト教が強い影響力を持つ社会では、神への信仰を示す行為や生き方こそ、その人の生の意味を決定するし、共産主義の国家では、国家に忠誠を示す行為こそが賞賛され、その価値を認められるだろう。

n しかし、こうした「大きな物語」が信用を失い、社会共通の価値観がゆらいだとき、私たちは何をすれば社会に認められるのか、そして生きる意味を見出すことができるのか、その規準を見失ってしまう。そのため、「大きな物語」のフェイクあ(ニセモノ)を無自覚のうちに握ね

学力検査問題「国語」(その二)

(2022 一般 I A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

造し、それを信じようとすることで、かろうじて生きる意味を見出そうとする。家族が各々の役割を演じるのも、一方では家族の理想像を見失っているにもかかわらず、幸せな家族の像をあえて信じようとしなければ、自分の居場所を見出せないからなのだ。

- このように、信じるべき価値を持たないからこそ、形式だけでも信じるふりをしてしまう精神、これを哲学者のスラヴォイ・ジジエクはシニシズムと呼んでいる。

(山竹伸二、『認められたい』の正体 承認不安の時代)より)

(注) 本文には問題作成者が必要に応じてふりがなを付した箇所がある。

問一 傍線部①～⑤のカタカナは漢字に直し、漢字には読み仮名を付けよ。

- ① 唯一 ② ヨクジ ③ ハイジヨ ④ ゲンミツ ⑤ ニセモノ

問二 A、B、C に適する接続詞を、次のア～オからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

- ア しかし イ そして ウ したがって エ ところで オ たとえば

問三 傍線部(1) 「『他人指向型』の社会」とあるが、それを具体的に説明している部分を文中から抜き出し、句読点を含まずはじめと終わりをそれぞれ七字で記せ。

問四 傍線部(2) 「現在の日本のほうが伝統的価値観と決別している面」の本質について述べている部分を文中から七十五字以内で抜き出し、句読点を含まずはじめと終わりの七字で記せ。

問五 傍線部(3) 「『他人指向型』の人間」とは、どのような人間か。文中の語句を用いて、「人間」という言葉を含めて二十字以内で説明せよ。

問六 傍線部(4) 「虚構の時代」とはどのような時代をいうのか。文中の語句を用いて具体的に六十字以内で説明せよ。

問七 本文の a ～ o の形式段落を、意味段落で四段落にすると、どの分け方が適当か。次のア～エから一つ選び、記号で記せ。

ア 第一段	a b c d e	第二段	f g h i	第三段	j k l	第四段	m n o
イ 第一段	a b c	第二段	d e	第三段	f g h i j	第四段	k l m n o
ウ 第一段	a b c d e	第二段	f g h i j	第三段	k l m	第四段	n o
エ 第一段	a b c	第二段	d e f g	第三段	h i j	第四段	k l m n o

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

2

次の文章を読んで、問一～問七に答えよ。

「当事者である」とはどういうことか。それは「先が見えない」ということです。その判断が正しいのかどうか、決断をくだす当事者は、先取りして結果を見ることはできません。

もちろん私たちは何らかの判断をする際に、「こうすればこうなるだろう」という見通しを立てた上でそうします。(考える)ということは「見通しを立てる」ということでもあります。しかし最終的にやってみた結果がどうなるかは、やる前にはわからない。真に創造的な判断であればあるほどそうです。ノーベル賞級の発見をした人たちも、けっして成果へのまっすぐな一本道が見えてやっていたわけではないのです。

さらに言えば、「判断する」というのは「これに間違いない」とポジティブな方向に決めるものばかりではありません。「これではない」というのもまた、重要な判断なのです。

さまざまな可能性や方法を考案し、それらについて考えぬいていく過程で、「これではない」「これでもない」ということが見えてくる。そして最終的に「もうこれしかない」と残った可能性、それが本当に正解であるのかどうかはわからないけれども、他の可能性を考えぬいた果てに「ありうる」としたら、これしかない」となった、だからそれを実行してみる。これは大きな判断です。

「この方法しかもう自分たちには残されていない」と追い込まれ、だから結果はわからないけれども信じてやるしかない。そういう形での判断のなかから成功に至った例は多々あります。

どちらもノーベル賞受賞者である山中伸弥さんと益川敏英さんが、『「大発見」の思考法』という共著を出されていますが、この本を読むと、先が見えないなかで徹底的に考えぬき工夫して未知の領域を開拓していく、科学者の思考がよくわかります。益川さんは、クオークと呼ばれる物質の最終単位がそれまで言われてきた四種類ではなく、六種類として考える「6元モデル」に、お風呂の中で思い至ったらしいのですが、これはそれまでこだわってきたモデルについて、どうしても実験結果とあわない、ならばこれをアキラメようと決めた瞬間に、ドカンときたそうです。もちろん天才的な頭脳の人だからこそ成ったことではありますが、「考えぬいた」ことが自信になって、「この道はない」ことがわかったというのですね。

もつと卑近な例で言うと、忘れ物やなくし物をしたときのことを考えるとよくわかります。なくした物を探すときにもつとも有効な方法は、ありそうな場所を一つずつしらみつぶしに探して、「ここには絶対はない」と可能性を排除していくやり方なのです。

たとえばカギをなくしたとして、私たちは同じバッグの中を何度も探すというをついやってしまいがちですが、これはあまりいいやり方ではありません。そうではなくて、まずバッグが気になるなら、そのバッグの中身を全部出してすべてを徹底的に調べ、「この中には絶対はない」ことを確認して可能性をつぶしていくのです。

なぜそうするかといえば、「絶対はない」領域を確定していくことによって、最終的に「あるとすればここしかない」という確信に至ることができますからです。この確信というのがひじょうに大事で、「この部屋にはないかもしれない」という不安があると、人は本気で探すことができますのでね。しかし「ここに必ずある」と言われると本気で探すことができます。だから見つかる。私も経験があるのですが、「必ずある」と言われると、本当にソウサクの結果が違ってくるのです。

「ここには絶対ない」と確認していくことは、「ここに必ずある」という確信を高めていくことになります。他の可能性を排除した末に、「ここにしか道はありえない」と信じることは、「肚を決める」ことであり、可能性を吟味し尽くした上での判断なのです。

いったん肚を決めたならば、どんなにダメなように見えても「ここに必ず道はあるはずだ」と信じて進んでみることに。この勇氣もまた重要なことです。どう見ても **I** で抜け道はないように見えるときも、たとえ細いけものみちでも、必ずどこかに切りぬける道があると信じる。デカルトも『方法序説』で同じようなことを言っています。森の中で迷ったときに、まずどれかの方向に行ってみて、それが間違っていたら別の方向をめざす。誰もが考えつくやり方ですが、デカルトはそれは良くないと言っています。こちらがいいという方向を一つ決めたら、断固としてそちらへ突き進んでいけとデカルトは言っているのですね。必ずそちらに道があると信じよと言う。

デカルトは、自分が徹底的に考えぬいて考えぬいて、もうこれ以上考えられないところまで考えて結論を出したならば、もう迷わずに行動する、そういう思考を練習して身につけたために、自分は不安と後悔から永遠にダツキヤクしたと言っています。これはすごいことで、まさしく「**II**」の精神ですね。

こうしてみると、判断の当事者になるというのは大変なことだというのがよくわかると思います。意見や感想を気楽な立場で言いあうとは違って、自分の判断は自分で引きうけ、実行し、そして結果の責任をとらなくてはならない。「これで行こう」と決めることには責任が伴うので、ある種の勇氣が必要になる。事柄はどんな小さなことであっても、判断することの重みというのは、自分でやってみて初めてわかるものです。そうすると、いま私たちが生きるこの現実をつくってきた、先人たちの判断の積み重ねがいかに重いものであったか、ようやく実感されてくると思います。

学力検査問題「国語」(その四)

(2022 一般 IA)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

ところが日本では、この「誰かが責任を負う」事態を避けるために、なんとなく「皆で決めた」ことにしてしまう場合がよくあります。失敗しても誰も悪くないということにする。これも一つの平和的解決システムではあるでしょうが、結果に対する責任が曖昧だと、逆に「決める」ことの価値も認められなくなってしまう。とくに、日本とは価値観の違う国の人たちと関わりを持たずにいることがほぼ不可能になった現代において、それはやはり問題だと思えます。

重い判断をする立場にある人はつねに孤独でもあります。私の友人はある会社で役職についていますが、取締役や副社長なら自分もやれないこともないと思う、しかし社長だけは別だと言っていました。「最終的に自分が決めなくてはいけない」という孤独ははかりしれない。

その大変さがわかれば、私たちは少なくとも、重い判断をしてきた人に対する尊敬の気持ちを持つことができる。そしてそのことによって自分の仕事や勉強の仕方が変わってくると思うのです。自分はいざとなったときにこういう判断ができるか。これがダメだというなら、違った判断が自分にはできたのか。つねにそれを問いつづけることが、判断力をみがく方法でもあります。

(齋藤 孝、『考え方の教室』より)

(注) 本文には問題作成者が必要に応じてふりがなを付した箇所がある。

問一 傍線部①②③のカタカナを漢字に直せ。なお、送り仮名があれば、ひらがなで記せ。

- ① アキラメ ② ソウサク ③ ダツキヤク

問二 傍線部(1) 「『これではない』というのもまた、重要な判断なのです」とあるが、「これではない」と判断することが重要といえるのはどうしてか。五十字以内で説明せよ。

問三 傍線部(2) 「卑近な例」の意味として適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で記せ。

- ア 参考になる例 イ 特別な例 ウ 具体的な例 エ ありふれた例

問四 傍線部(3) 「自分が徹底的に考えぬいて考えぬいて、もうこれ以上考えられないところまで考えて結論を出したならば、もう迷わずに行動する」について、この部分とほぼ同じ意味の個所を、文中から五十字以内で抜き出し、はじめと終わりをそれぞれ五字で記せ。

問五 波線部A、Bについて、本文における意味を、それぞれ三十字以内で説明せよ。

問六

I

、

II

 には、それぞれ四字熟語が入る。適当なものを、次のア～カからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

- ア 言語道断 イ 一念発起 ウ 熟慮断行 エ 明鏡止水 オ 徹頭徹尾 カ 四面楚歌

問七 傍線部(4) 「結果に対する責任が曖昧だと、逆に『決める』ことの価値も認められなくなってしまう」とあるが、その理由を五十字以内で説明せよ。

学力検査問題「国語」(その五)

(2022 一般 I A)

解答はすべて解答题用紙に記入せよ。

3

枠内は用語の定義についての説明である。次の文章を読んで、問一～問三に答えよ。

- A 直喩は、直接に二つの物事を比較して例えるもの。たとえるものととえられるものとを別けてあげる比喩。
- B 隠喩は、比喩であることを著していない比喩。「のようだ」などの語句を用いない方法。
- C 換喩は、ある物事を表現するのに、それと深い縁故のあるもので置き換える表現方法。

(『日本国語大辞典』小学館より)

肌の白さに着目して、ある王女に「白雪」という名前をつけるとすれば、それは隠喩型の命名だが、いつも赤いシヤプロンをかぶっている女の子を「赤頭巾」というあだ名で呼ぶのは、換喩型の名づけである。

世界でもっとも有名な女の子のひとりだというのに、あなたはたぶん赤頭巾ちゃんの本名をご存じないだろう。おばあさんを見舞いに行く途中、道草をくつてしまい、そのあいだに、気の毒なおばあさんは狼にひどい目に会わされてしまう……という、あの女の子の本当の名まえを、私も知らない。親のつけてくれた本名が、きつとジャンヌとかカトリーヌとか、ブリジットとかフランソワーズとか、何かあったはずだ。にもかかわらず、世界じゅうの人々がみな、彼女をあだ名で呼んでいる。

あだ名は、レトリック現象の原始形態だと言っている。人間は深い関心をいだいている対象に対して、とりわけ本名よりあだ名を使いたがる。これは不思議な現象ではないか。心から愛している対象、心底から憎んでいる対象、気にかかる相手を名ざすとき、ふつうの表現よりもレトリカルな表現を使いたがる傾向がありはしないか。赤頭巾のものがたりでは、何ととっても彼女が主役であり、聞き手の関心をいちばん強く引きつける焦点である。だからこそ、彼女だけがあだ名で表現されていて、おばあさんも狼もふつうの名称で呼ばれているのだ、というのほうがちすぎだろうか。

あだ名そのものが即ことばのあやと言うことはできない。その呼び名が創作され、まだ名づけの動機が生き生きと感じ取られる初期の段階にのみ、それはことばのあやなのだ。やがて周囲の人々が全員その呼び名を使いはじめ、通用するあだ名として定着してしまえば、もはやそれは、ほとんど本名並みの名称となる。ほとんどことばのあやではなくなる。けれども、あやの仕組みを考える上では、名づけられてまもないころのあだ名の風味は、典型的な比喩の姿を示している場合が多く、興味をそそる。そして、あだ名の形式のうちでいちばん広く見られているものが白雪姫型(隠喩)と赤頭巾型(換喩)であることは、統計などとってみるまでもないだろう。

お姫さまと白い雪のあいだには、現実的には何のかかわりもない。雪だるまのように雪でできているわけでもなく、雪女のように雪のなかに住んでいるのではない。ただ、色や清純さが似ているだけである。

ところが、くだんの女の子のほうは、いっこうに赤くもなく、頭にかぶるシヤプロンとは似ても似つかぬ。そのかわり、現実にかぶっている。人間と頭巾は現実的にかかわり合い、まさに接触し合っている。

「いま私はバルザックを読んでいる」という文章は、全然レトリカルな感じがしない、ごく常識的は表現だが、そこにも換喩が働いている。「バルザック」は人名であり、人間である。しかし、私はいま人間を読んでいるのではなく、また人間の顔色を読んでいるのでもなく、人間とは似ても似つかぬ書物を読んでいるのだ。ただ、その作品と作者は、いわば親子のようなきずなでつながっている。これは「灘」とか「ボルドー」、「コニヤック」、「スコッチ」などという地名のゆかりでその土地名産の液体を表現する場合と同様、広い意味で赤頭巾型の、縁故による比喩である。

(佐藤 信夫、『レトリック感覚』より)

(注) 設問の都合上、一部表記を省略した箇所がある。

※シヤプロン 中世西欧の頭巾、帽子

学力検査問題「国語」(その六)

(2022 | 一般 I A)

解答はすべて解答用紙に記入せよ。

問一 傍線部(1)～(3)の語句の文中での意味について、次のア～エからそれぞれ一つ選び、記号で記せ。

(1) 道草をくう

ア 馬が道ばたの草を食べる

イ 無駄話をして怠ける

ウ 無駄話をして時間を無駄にする

エ 余計なことをして時間を無駄にする

(2) うがっ

ア 穴を開ける

イ 物事を疑ってかかる

ウ 物事の本質を的確に言い表す

エ 人情の機微に触れる

(3) くだん

ア 人の顔と牛の体をした妖怪の名前

イ 前に話したこと

ウ 互に分かっていることを省略した言い方

エ いつものように

問二 波線部の「ことばのあや」とは、どのような意味の表現をいうのか。文中から抜き出し、十字以内で書き抜け。

問三 次の①～④に使われる比喩は、A～Cの定義のどれに当たるか。それぞれ記号で記せ。

① この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。(芥川龍之介『羅生門』)

② あまり新しい事実は、まぶしくてよく見えない。(外山滋比古『異本論』)

③ 向うの杉林の前には、数知れぬ蜻蛉とんぼの群が流れていた。(川端康成『雪国』)

④ まるで御殿場の兎が急に日本橋の真ん中へ放り出されたような心持ちであった。(夏目漱石『倫敦塔』)

解答用紙 [国語]

般 I A
2022

準
中

1

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
工	、	ギ	社	行	は	は
	生	ー	会	動	じ	じ
	き	な	共	の	め	め
	る	ど	通	指	何	当
	意	の	の	針	の	時
	味	フ	価	を	価	の
	を	エ	値	他	観	ア
	見	イ	観	人	も	メ
	出	ク	が	の	さ	リ
	そ	を	ゆ	判	終	カ
う	信	ら	断	わり	終	
と	じ	ぎ	に	を	わり	
す	よ	、	委	を	も	
る	う	宗	ね	気	重	
時	と	教	て	に	要	
代	す	や	い	し	で	
。○	る	イ	る	て	あ	
	こ	デ	人	い	っ	
	と	オ	間	る	た	
	で	口	。○			

① A
② 工
③ ア
④ オ
⑤ 酷似
⑥ 排除
⑦ 厳密
⑧ 偽物

2

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
I カ II ウ	に	な	自	と	あ	は
	る	る	分	い	ら	じ
	皆	と	で	う	ゆ	め
	で	い	判	こ	る	つ
	決	う	断	と	可	た
	め	こ	し	。○	能	ん
	誰	と	。○	性	を	肚
	も	。○	実	行	し	進
	重	。○	行	し	十	ん
	責	。○	。○	。○	分	で
任	。○	。○	。○	に	み	
を	。○	。○	。○	検	る	
取	。○	。○	。○	討		
ら	。○	。○	。○	し		
な	。○	。○	。○	て		
い	。○	。○	。○	考		
形	。○	。○	。○	え		
で	。○	。○	。○	抜		
は	。○	。○	。○	き		
、	。○	。○	。○	、		
判	。○	。○	。○	絞		
断	。○	。○	。○	り		
す	。○	。○	。○	込		
	。○	。○	。○	む		
	。○	。○	。○	過		

① 諦め
② 搜索
③ 脱却

3

問三	問二	問一
①	レ	①
C	ト	工
	リ	
②	ツ	②
B	ク	ウ
	現	
③	象	③
B	(レトリカルな現象、 レトリカルな感じ)	イ
④		
A		